

123

自身の被災経験と女性目線が奏功した LSA の果たした役割

**社会福祉法人
南三陸町社会福祉協議会「結の里」**

令和7年6月現在



LSA 佐藤さん(向かって右)と事務局長 高橋さん



取組主体

民間団体(南三陸町社会福祉協議会)

対象者・受益者

住民

実施時期

平成30年4月～

活動地域

宮城県

キーワード

まちづくりワークショップ、コミュニティ支援、LSA

取組ポイント

平成30年4月にスタートした「結の里」は、定期的な住民目線によるワークショップ開催等により、地域のコミュニティ形成を図りながら着実に復興への歩みを進めてきた。とりわけ自らも被災経験を持つ住民の中から生まれたLSA・生活援助員(災害公営住宅担当職員)の女性たちが災害公営住宅において果たした役割は大きい。

取組の背景・経緯

- 平成30年、「結の里」は南三陸町社会福祉協議会により子どもから高齢者まで「みんなの居場所ささえあいの拠点」になるよう山を造成した土地に開設された。計8棟(約169世帯)から成る災害公営住宅の真ん中に位置し、雨天の日も傘をさすことなく住民の誰もが気軽に足を運べるよう工夫されている。
- 開設の前年には、住民向けワークショップを6回開催し、住民が「結の里」に何を望んでいるかを引き出し、住民目線で何ができるかを自発的に考えるような雰囲気づくりに繋げることに成功した。開設が当初の予定より一年遅れたことはむしろ南三陸町社会福祉協議会にとっては好機であった。

取組の概要

- 現LSA・生活援助員(災害公営住宅担当職員)の佐藤直美さんは「最初は何かお手伝いができたらいいかなぐらいの気持ちでした」という。震災直後、南三陸町社会福祉協議会が行ったLSAの前身である生活支援員(仮設住宅担当支援員)の公募には200人を超える地域住民が集まり、その殆どが自らも被災経験を持つ家庭の主婦だった。制度や福祉に関する3日間に及ぶ集中的な研修を経て、支援員による被災住民の生活支援や見守りを中心とした「被災者生活支援センター運営業務」が本格的にスタートした。
- 「結の里」開設前、住民向けワークショップを6回開催して3つの柱が生まれていた。1つ目は「カフェ」、2つ目は「みんな食堂」、3つ目は「走らない運動会」等四季折々のイベントである。住民の誰もが他人事ではなく、自分たちで考え、自分たちで取り組んでいく3つの柱が今も地域の輪を広げ続ける。この3つの柱を中心にLSAが地域住民の日々の生活に支障がないか心を配る。



「結の里」3つ目の柱「走らない運動会」

- 「カフェ」には、高齢者から子どもまで幅広い年代の住民が集まる。全て100円のメニューを堪能し、さまざまに日々の生活や健康上の話をしていく。そのような構えることのない会話の端々から、LSAは住民の状況を細かに把握していく。毎月開催される「みんな食堂」においても孤食防止、介護予防に役立てつつ、LSAが健康上の不調が見られる住民がいかに目を配る。「走らない運動会」等四季折々のイベントでは、地域住民が企画から取組み、自然と共に助の流れが生まれるようLSAがそれぞれのポイントで後押しをする。住民たちの自主性を引き出すことで、地域全体を活気づけているLSAの役割は大きい。

工夫した点・特色

- LSAの前身である生活支援員の活動は、震災直後、仮設住宅ごとに6箇所のサテライトを設置し、生活する上での困り事がないかを一軒一軒訪ねて回ることから始まった。最初は先の見えない不安に対する苛立ちからか訪問 자체を拒んだり、「何か支援物資は持ってきたのか」と不躾に口にしたりする住民もいた。それでも怯むことなくあくまでも住民目線の訪問を続けたことにより、しだいに住民との間に確固とした信頼関係が築かれていく。自身の被災経験がより深く住民に寄り添うのに役立ったのはいうまでもない。
- 南三陸町社会福祉協議会の高橋吏佳事務局長は「LSAは、その多くが主婦。主婦の目線はいろいろなアンテナが高く気づきも早い」という。LSAは特別な資格を持たない。主婦から支援員になり現在LSAとして活動している。だからこそ、住民目線により身近で的確な支援につながっていく。一方的に指導する立場からの支援ではなく、共に考え住民の意向を汲んだよりあたたかみある支援が生まれる。



「結の里」にて LSA と談笑する高齢者たち

取組の効果

- 厚生労働省・宮城県による「被災者見守り・相談支援事業」としてのLSA事業は令和7年3月をもって終了したが、今も別の形を取って5名のLSAが活動を続けている。14年という年月をかけて築いてきたLSAと住民の信頼関係は、住民がむしろLSAの手が回らない部分を自然と助け補うという新たな地域コミュニティの在り方を形作っている。LSAが常駐する相談室や集会所に灯りがついているか、LSAの車が駐車場にあるかを気に掛ける住民も多いという。あたりまえに相互に支え合い助け合う関係性ができあがっており、まさに伴走支援の成功例といえる。
- こうしたLSAの活動、住民主体の「結の里」の取組は、全国においても例を見ない画期的なものであることから、全国の自治体からの見学が後を絶たない。直近では、令和6年能登半島地震により甚大な被害に遭った石川県からもLSA事業を参考にしたいとの希望による見学があった。東日本大震災により南三陸町は多くのものを失いながらも、「結の里」を中心にLSAはもちろん、社会福祉協議会、地域住民の誰もが自分たちの力で地域を盛り上げていくことで見事に再生を続けている。

主体・参加者の感想

- 開催されたワークショップについての感想（参加者）
 - ・みんなで集まるっていいね、久しぶりに会えた～。
 - ・若返る！楽しみを創ってくれてありがとう。
 - ・自分たちで動いていかないとね。やめられない！
- LSAの支援を受けた災害公営住宅住民の感想（住民）
 - ・居るだけで、灯りがついているだけで安心なんだよな。
 - ・聴いてもらってつないでもらってここで解決。
- 実際に支援を担ったLSAの感想
 - ・住民が自分の力を地域に活かそうとする姿、伴走したい。
 - ・住民の視点で声を聞くことで、距離感が近くなる。
 - ・この仕事に就いてよかったです。

助成金など支援・協働にかかる情報

- 仮設住宅等での被災地支援 平成23年6月～30年3月
「緊急雇用創出事業」及び「地域支え合い体制整備事業」を活用した「被災者生活支援センター運営業務」等を南三陸町より受託
- 災害公営住宅での被災者支援 平成28年4月～令和7年3月
「被災者支援総合交付金」を活用した「常駐型生活支援員配置事業」を南三陸町より受託
- 災害公営住宅での高齢者見守り支援 令和7年4月～
「介護保険事業（地域支援事業）」を活用した「災害公営住宅高齢者見守り・相談支援業務」を南三陸町より受託

連絡・問い合わせ先

社会福祉法人南三陸町社会福祉協議会 TEL : 0226-46-4516

HP : <https://www.minamisanriku-syakyo.or.jp/>

※写真は社会福祉法人南三陸町社会福祉協議会からの提供による

124 震災が更なる原動力となった 障害者の居場所づくりへの熱い想い

特定非営利活動法人あさがお

令和7年11月現在



きぼうのあさがおの皆さん

取組主体	民間団体
対象者・受益者	障害者
実施時期	平成16年12月7日～
活動地域	福島県南相馬市
キーワード	障害者就労支援

取組ポイント

小規模作業所から始まった「あさがお」は、特定非営利活動法人格を取得後、地域活動支援センター・就労継続支援B型事業所等精力的に活動拠点を増やしてきた。高校時代に障害のある同級生を手助けしたことから芽生えた福祉への熱い想いが、西みよ子理事長の原動力となっている。東日本大震災を機に、特に配慮を必要とする障害者の受け入れ体制が必要であることを痛切に感じた西理事長は、これまで以上に障害者が安心して暮らすことができる更なる居場所づくり、仕事づくりに邁進する決意を新たにした。

取組の背景・経緯

- 西みよ子理事長が福祉に対し強い想いを抱くようになったきっかけは、高校時代に障害のある同級生をサポートしたことから始まる。当時、まだ社会的に障害者に対する理解が低い中、校内でボランティアサークルを立ち上げ、熱心に福祉活動に打ち込んだ。その後も福祉に対する熱い想いは全く止むことなく、子育てを終えた50歳で本格的に再始動する。平成14年、最初に設立した小規模作業所「あさがお」では、障害のある人たちに極力負担を生まないよう作業内容に配慮し、大豆栽培、味噌づくり、資源回収等を行った。女性として、主婦としての経験や勘も駆使し、更に軽作業に適した食品品目を増やしていく。平成16年法人格を取得、平成20年地域活動支援センター「いっぽいっぽ あさがお」を設立。翌平成21年、遂に障害ある人たちが雇用契約を結ばずに軽作業などの就労訓練を行い工賃が得られる就労継続支援B型事業所「きぼうのあさがお」設立に至る。並行してグループホーム「いやしの家」を3カ所開所。計7カ所を開設し、心強く抱き続けた「どうにかして障害者が働きながら賃金を得ることのできる自立した環境を整えたい」という想いは、徐々にではあるが確実に軌道に乗ったかのように思えた。
- そのような折、東日本大震災が発生する。西理事長は、家族の元に帰すことのできない障害者21人とともに避難所を点々とする中、ふだんとは異なる環境の変化に弱い障害者が、安心して落ち着ける場所の更なる必要性をより痛切に感じことになった。「障害に負けない力を活かす場をもっと作らなければ」と、西理事長は決意を新たにした。

取組の概要

- 「きぼうのあさがお」が製造する代表的な食品に、上質な青ばた豆を原料にした豆腐がある。「青ばた豆は、ごちそう豆」と、西理事長は言う。福島では、お正月など特別な日のおもてなし料理に使われる。脂味がありながら低脂肪で抗酸化作用にも優れた機能食材もある。非常に育て易いことにも、西理事長は目を付けた。ただ、上質な原料だけに、豆腐1パック290円とどうしても割高になる。避難所から南相馬市に帰還後、西代表は東京に向かう。避難者向けに無料開放されていた東京のホテルに滞在し、青ばた豆の豆腐を毎日事業所から送らせ、精力的に売った。東京なら確実に売れると考えたからだ。その間、専門学校の夜間部に通い、「精神病患者の人も助けたい」と、精神保健福祉士、社会福祉士、介護福祉士の資格も取得した。障害者福祉に役立つと思われることは、時間を無駄にせず全て習得した。



東京で販売する西理事長

工夫した点・特色



青ばた豆を原料にした商品

- 再び南相馬市に戻った西理事長は、グループホームの新設に奔走する。震災後の資材及び建設費高騰の中、福島県の社会福祉施設等施設整備補助金を活用した。資金繰りは決して楽ではなかった。震災前とは医療環境も異なり、入所者の体調管理に医療機関を探すことも必要だった。それでも、奮闘する西理事長の姿に共感した周囲の人たちが協力を申し出てくれたことに大きく支えられた。
- 地元のパティシエが活動に参加してくれたことでお菓子の製造販売も可能になり、障害者の就業機会の幅が広がった。東京での豆腐や大豆、野菜の販売には、次世代農業技術を開発する農業ベンチャー企業「銀座農園」が場所を提供してくれ、主婦ならではのアイディアを活かし、豚汁やおこわ、鯛焼きなども幅広く売った。日頃から地域との繋がりを大切にしてきたことから、地元の農家が野菜を提供してくれたりもする。こうした数々の支援に励まされ、震災後4カ所のグループホームを開所するに至る。平成27年には生活介護・自立訓練を行う多機能事業所及び相談支援事業所「ともに」、令和2年には児童発達支援・放課後等デイサービス「はぐくみあさがお」も開設した。

取組の効果

- 地道かつ着実な活動が実り、「あさがお」の訓練生の賃金は令和6年度月平均で46,851円となり、福島県内で賃金水準1位となった。しかし、障害者が自立して生活するためには、障害年金の他に7~8万円は必要だと西理事長は考える。そのためにも、更なる事業の拡大が急務となる。青ばた豆を原料とした豆腐から始まった製造加工品は、現在、豆乳や弁当、スイーツに至るまで品目を増やしている。最寄りの高速道路のサービスエリアに納品する450円のおにぎり2個パックは好評で、1日平均40~50個、土日には80~90個を売り上げる。「あさがお」製造を示すオリジナルキャラクターシールも徐々に定着しつつある。
- 現在、フリーズドライ食品を軌道に乗せるべく、ブロッコリーやきくらげ、味噌汁、みょうが等さまざまな品目で日々試作を重ねる。大量に廃棄される規格外の食材を再利用することで食品ロス解消も目指す。高額なフリーズドライ用機械は、支援団体から寄付された。だが、運営は決して楽ではない。それでも、「障害者が自立した生活を送ることができる世の中を作りたい」という強い想いが揺るぐことはない。新たに、社会福祉協議会から空き物件を借り、障害者が働くカフェを作りたいと計画している。「偉いのは私ではなく、障害者の人たち」と、さまざまな困難に対峙しながら、障害者の更なる立場向上の実現に日々奮闘する西理事長は朗らかに笑った。



あさがおの作業風景
上:きくらげの栽培
下:青ばた豆の収穫

利用者・連携団体の感想

- あさがお入所者の感想
 - ・一人でいるより仲間と一緒に作業ができるて楽しい。
 - ・熱々のお昼ご飯が、100円で食べられて最高！！
- 入所者家族の感想
 - ・本人が日々楽しく通ってくれていて大変ありがたい。

助成金など支援・協働にかかる情報

- ・公益信託うつくしま基金
- ・福島県共同募金
- ・地域経済産業活性化対策補助金
- ・パブリックリソース財団
- ・中央競馬馬主社会福祉財団
- ・ホッピービバレッジ助成金(震災後毎年)
- ・ヤマト福祉財団
- ・アルソックありがとう財団

連絡・問い合わせ先

特定非営利活動法人あさがお

〒979-2335 福島県南相馬市鹿島区鹿島字上沼田120

TEL/FAX : 0244-46-2527 HP : <https://asagao2527.web.fc2.com/index.html>

※写真はあさがおり提供